立商業の生徒が走って私たちの後を追って来た。

「天満町が火災で通れない君たちに付いて行く」と。私は先ほど小高き丘に登りて状況を偵察していた。市立商業の生徒は、また一団となり横川に向かう。

途中、己斐駅と横川駅間の鉄路の障害を確認する。蒸気機関車で徐行すれば通行可能か不可能かの確認。生徒一同は三滝鉄橋東側の鉄路に上がる。

三滝鉄橋東側より四方を眺めれば、付近の半壊した多くの家屋より自然発火で火災が発生し始めている。東に進み横川駅を通る。横川駅舎は倒壊しているが火災はまだ発生していない。八月六日の午前十一時二十分である。私の下宿先は横川駅南西の打越町であったが完全に燃え尽きていた。今隣のレンタン倉庫周辺が盛んに燃えている。私の大事な物品は完全に灰となる。

私の確実に見た火災の範囲は天満町土橋周辺と広瀬町・打越町・横川町・三篠町である。

これらの町は殆ど火災に包まれており、全焼と判断出来た。

更に東に進む。横川駅東の可部街道の踏切を越えると、市内から避難して来た負傷者が進路を絶たれ多くの人が鉄路に倒れて死んでいた。衣服は余り痛んでいない。更に東に進む。現在の五十四号線上の鉄路より見れば、当時の十二間道路は道幅が広く火災の範囲が良く見える。両側の町並みは火災に包まれているが中央部は通行可能の状態。人影は無い。

三篠の三丁目当たりまでが今盛んにもえている。三篠の消防署の消防自動車二台が並んで燃えており、隣の国鉄横川自動車区の車庫が自動車と共に炎上中である。更に東に進み三篠鉄橋西側に到着。寺町の山崎君は右折、南下して寺町に向かうと言う。寺町方向を見れば今盛んに別院が燃えている。煙間に横川鉄橋（普通の橋）が見える。楠木・寺町・広瀬と川の東側の白島町が今盛んに燃えている。

私は山崎君に「太田川を背にして火災より身を守り焼死を防止しなさい」と言って別れ、彼は猛烈な火災に包まれた寺町に向かう。煙間に彼の姿が見えなくなるまで見送る。

橋の袂（たもと）にいた青年が「君たちは何処からきたのか」。私は「市立商業の生徒で己斐から来た」と被害の情報交換を行う。その青年は言う「これは分子の爆弾である」